
暇な奴らの日常生活

和波智淳

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

暇な奴らの日常生活

【コード】

N4854E

【作者名】

和波智淳

【あらすじ】

未来らしくない未来世界の片隅、獣人の大学生と、二人の擬人^{ヒューマノイド}が暮らす寄り合い所帯の、ある朝の挿話。

ガッツは明け方の淡い陽光の下で家路を辿った。夜中のアルバイトからの帰り道だった。

擬人であるガッツは、生身の生物、すなわち人ほどは睡眠時間が要らない。適当な休息は必要だが、生物時計に縛られないから、夜も昼も関係なしに活動できる。エネルギー源についても同様だ。人ほど多くの量は食わないし、それも有機物質でさえあれば 例えば人には消化不可能なプラスチックでさえ、食ってエネルギーに変えることができた。

だから、彼が夜中のバイトをするのは基本的には食うためではない。では、より大まかに生活のためかと言えば、ある意味ではそうだ。食事も睡眠も少なく済んでも、衣・住の必要は残っている。が……それも、一昨年以来他人の家に居候を続けているガッツにとっては決定的な理由ではなかった。

つまり、ガッツがバイトに精を出す理由は、ひとえに趣味に注ぎ込む費用を捻出するためだ。大量の静止画・動画にかかる情報料、数百年分の作品データから立体化されたプラモデルやフィギュアの価格……その程度で恐れをなしては、オタク精神の後継者を自認することなどではしない。己の趣味の向く物を、人目も憚らず追求し尽くす態度こそ、オタクという文化現象が生んだ一つの成果である 少なくともガッツはそう考えている。だから彼は労働する。そして得たものの大半を趣味に注ぎ込む。奇妙な点は何もない……と彼は考える。

しかし、だ。いかにガッツが強靭な精神耐久性を誇る擬人であり、強固な目的に裏付けられて行う労働でも、その間常に一つの事ばかりに集中してられる訳はない。工事現場で作業や交通整理を行う間、あるいは製造工場で単純作業や擬人の力を活かした頭脳労働を行う間も、ガッツの思考はしばしばもつと趣味の向く方に飛ぶ。

この日のバイトの間もそうだった。暗い道路で発光する棒を振って通行する者に合図をしつつも、ガッツは、その間に配信されたであろうある番組の事ばかり考えていた。彼としては最近もつとも気になる番組の一つなのだ。一応、棲みかを借りている相手に十分念を押して録画を頼んでおいたが、その相手もぐうたらな上に忘れっぽい性格と来ている。心配するなという方が無理な話だ。

むろん、こうして家路を辿る間も不安は解消しない。早く番組を確認したいという気分も重なって、ねぐらが近づくにつれてガッツは速足になった。……とはいえ、同居人たちなどがそれを見れば、普段の歩調とどこが違うのかと言っただろうが。

やがて、ねぐらであるアパート 入居者の大半は学生だ の前に着いたガッツを迎えたのは、辺りに漂う塩みと胡椒のきいた油の匂いだった。

建物の外に付いた階段を上り、住み着いている部屋の前に立つと、匂いはますます強くなった。ふと扉の右上に付いた換気扇を見上げると、ごうごうと音をたてて回転している。周囲にまき散らされた匂いは、どうやらこれが目の前の部屋の中から汲み出しているものらしい。朝飯にしては普段よりも少々早いようだと思しながら、ガッツは無造作に扉を開けた。

「只今」

「あー、お帰りなさい」

真つ先に目に入ったのは、玄関すぐ脇の調理台に向かい、細身の体にはやけに大きく見えるフライパンを片手で手際良く扱いこなしている擬人の姿だった。フライパンの中でかき回されているのは野菜炒めらしい。菜箸が回り鍋が躍るたびに、先ほどの油と調味料の匂いに加えて野菜の旨みの匂いがたつ。

「リヴァイヴァか。朝飯の支度にしては少々早いようだが、何かあったのか？」

「うん、まあ……どうしたもこうしたもないよ。こっちは昨夜ゆうつからいろいろ大変でさ」

「と言うところを見ると、どうやら俺のために準備した訳ではなさそうだな」

「え？ ああ、一応それも考えてたけど……って、あ、そこっ、足元気をつけてっ！！」

「む！」

室内に上がったガッツが敷居を越えて台所から居間へ入ろうとしたのと、リヴァイヴァが警告の声を上げたのと……それが起きたのはほとんど同時だった。

「ふグアオウツ！！」

「おっと！」

ガッツは小太りの体型に似合わぬ素早さで、噛み出された鋭い牙先を避けていた。

寝そべっていたものは、単に踏まれた事を示したかっただけで、本気で噛みつく気はなかったのだらう。一度吼えついたあとは、不機嫌な目でガッツを見上げながらも、再び大人しくその場にうずくまった。薄黒い縞の入った金色の毛並と炎色のたてがみの中で、薄緑色の両目がぎろぎろと動いている。

「大丈夫？ 噛まれなかった？」

ガッツが台所の方を振り返ると、湯気を立てるフライパンと菜肴を持ったリヴァイヴァが、体ごとこちらに向き直っていた。調理台のスイッチが切れているところを見ると、どうやら料理が完成したらしい。

「ああ、俺は平気だ。だが……何故こいつはいきなり野性に戻っている？」

自分が話題に上っていると気づいてか、獅子の頭と人の体つきを持つ生き物は、寝たふりをしながら薄目を開けて、二人をちらちら見回している。

「いや、それが……何しろ俺も寝てた間の事で、確かな事は分からないんだよ。とりあえず腹減らしてるみたいだから、何か食わせりゃ元に戻るかと思って、こうやって準備してたんだけど」

そう言いながらリヴァイヴァは手近にあった平皿を引き寄せ、フライパンの中味を山盛りに盛り付けた。その量から察するに、保管してあった野菜や何かをあるだけ全部ぶちこんだらしい。もともと消費の多い獣化能力者に加え、居候の擬人を二人も抱えた所帯は、買いこむ食料の量も馬鹿にならないのだ。

盛れるだけ盛ってもまだ中味の残っているフライパンを調理台に戻して、リヴァイヴァは皿を取り上げた。が、一步踏み出したところで、ふと何か思い出したように足を止める。

「あ」

「どうした？」

「いや。……今さら言うのも何だけどさ、これってタマネギ大量に入ってるけど、ネコ科動物に食わせてもいいのかな？ ネコにタマネギ食わせちゃ駄目だって、どこかで聞いたような気がするんだけど……。あ、そういうえば塩気や胡椒の気がきついのも駄目って聞いた気がするし、そもそも肉食動物って野菜食わないよね。……どうしよう。まずかったかな」

「いや、この場合はさほど気にする必要はないと思うぞ」

既に目を真ん丸に見開き、今にも起きて餌に飛びかかりたいのを必死でこらえているらしい獣人を見下ろしながらガッツは言った。

「こつ見えても、こいつも基本は人間だ。人間の格好の時には、タマネギだろうが塩辛い料理だろうが、毎度平気で食っているじゃないか。それが獣化したからといって、代謝機能にさほど変化があるとは思えんだろう」

「それは……言われてみれば確かに」

「だろう。……だいたい俺は、獣化したこいつがタマネギを食ってひっくり返ったところなど見たことがない。むろん、塩分の取りすぎで体調が悪くなったところもな」

言つと、リヴァイヴァは瞬きをしながらガッツの顔をまじまじと見た。

「……そっか」

やがて呷いたりヴァイヴァは、獣の前まで皿を運んで来ると、まるでペットの食器のように床の上に直に置いた。

それに対する人獅子の反応は凄まじかった。たちまち鼻面を突き出してふんふんふんふんと激しく匂いを嗅ぎ、見る間に大口を開けて皿に喰らいつく。が、見た目通りの猫舌に、出来たての料理は少々熱すぎたようだ。ガフツと咳き込むような音をたてたと思うとすぐ顔を上げ、牙や舌先に野菜を引っかけながらハフハフと口を開け閉めしている。

「えらい食いつぶりだな。……まさか、こうなったのも昨晚から何も食わなかったからじゃあるまいな？」

「あー……それ、本当かもしれない。昨日の晩、夕飯作ったんだけど、忙しいって言って全然食べなかったんだよ。どうも同人誌の締め切りが迫ってたときに、何かの授業の中間レポートまで重なっちゃったみたいで。それで昨夜、焦って作業始めて、今朝までほぼ徹夜でやってたみたいなんだけど……」

「その結果がこれか。食う間も寝る間も惜しんだ意味が全くないな」
そして、この状況ではあの番組の録画もおそらく忘れ去られているな……とガツツは思いながら、餌の熱さにもへこたれずに貪りついている野性動物の側にしゃがみ、様子を観察した。

通常は理性を保ったまま変身能力を発揮できる「彼」だが、ときどき何らかのストレス　主として空腹　のあまりに変身する事があり、その場合は今のように動物並みの頭になってしまう。それでも一応、仲間のことは信頼できる相手と認識しているようだし、ぐうたらな性格もそのままだから、注意深く扱えばさほど危険ではないのが幸いというものだ。でなければ迷惑を被る相手も激増していただろう。幸い自分は擬人だから、食われる心配だけはないわけだが……とガツツは思う。

鼻先で野菜を散らし、少しでも冷めた所からがつつく獣の頭に、リヴァイヴァがつと手を伸ばした。餌に夢中の相手は特に嫌がる素振りも見せないで、そのまま炎色のたてがみに指を突っ込んで撫

でてやる。それでも嫌がらないので、金の地に黒縞の入った額へと撫でる場所をずらしていく。目のすぐ上を撫でてやると、今度はくすぐったそうに目を細め、首を振ってリヴァイヴアの手から逃れようとした。

リヴァイヴアが手を引つ込めても、半獣半人は食事を中断したまま、まるでたった今日を覚ましたかのように目だけをしばしばと瞬かせている。……と、不意にその目が眠たげながらもまっすぐにリヴァイヴアを見上げた。

「……あー……レヴィ？」

言い終えるより先に、彼は眠たそうな大あくびをした。たった今まで自分が何をしていたかなどは、完全に意識にない風情だ。

「やっと思きたか、アルフ」

ガッツが言うと、今度は寝起きのようなのんびりした目をガッツに向けてくる。

「あー、ガッツ、おはよ。ていうか、お帰り。……って……あれっ？ ……えっ？ ……が、ガッツ、今、何時っ!？」

目の色が変わるとはまさしくこの事だろう。眠たげな、言うなればまだ動物並の思考回路を引きずっていた眼差しが、見る間に状況を理解した色に変わるのを、ガッツはなかなか興味深く眺めた。

「やっと思況が分かってきたようだな」

「もう朝だよ。まだちよつと起きるには早いかもしれないけど」

リヴァイヴアも加わって言うと、人とは異なる獣の顔にも、何やら愕然とした表情が浮かぶのが見て取れた。

「……すまん、ガッツ！ 今朝の番組録つとくの忘れた。いや、寝る前に予約しとくつもりだったんだけど、レポート書いてたら何とつか、余裕がなくて……」

「……そんな事だろうとは思っていたがな。お前が獣化していた時点で十分に予測はできた。だが、そうなる……」

ガッツは思わせぶりに一呼吸おいて、続けた。

「ソフトが発売された暁には、その費用は全額お前に負担してもら

うしかないな」

「えーっ！ そんなああ……せめて一話分だけじゃ」

「駄目だ」

「んな殺生なあっ！！」

「……もー、二人とも朝早くからそーゆー会話で大声出さないでっ
てば」

先ほどから二人のやり取りを呆れたように見ていたリヴァイヴァ
だったが、ふとそう言うと、二人の脇を通り抜けて居間の中へと入
っていった。二人がその姿を見送っていると、リヴァイヴァは、手
に収まるほどの四角い物体を持ってきて二人の前に突き出した。

「ほら。どーせあのアルフの様子じゃ、変身しなくても録画忘れそ
うだと思ったから、代わりに俺がやっといたよ。全くもー、ガッツ
さんもさ、心配だったら今度からは自分で予約やっといてよね」

「ああ……分かった」

そう言うしかないガッツに記憶媒体を渡すと、リヴァイヴァはま
た二人の脇を抜け、今度はアルフが餌を食べていた食器を拾った。

「アルフだってさ。夜なべ仕事してて腹減ったんだったら、自分で
夜食なり何なり作ったらいいんだよ。どっちみち食い道楽なんだか
ら」

これにはアルフが咳き込みそうになった。

「……オ、オマエ、何でオレが料理できるって知ってんの？」

「一緒にウオーリアー乗ってりゃあね、パイロットの考える事なん
か嫌でも筒抜けなんです。……これ、後で全部一人で食べてもらっ
からね」

そう言いながら再び調理台の前に立ったりヴァイヴァの後ろ姿を
見やっつて、アルフとガッツは何となく顔を見合わせた。

「……あのさ。レヴィの奴、最近だんだんエルヴィアに性格似てき
てないか？」

「付き合う相手がお前という共通点があるからじゃないのか？ ……
…それよりもお前、そろそろ人間に戻ったらどうだ。その格好では

表へも出れまい。家の中では下手をすれば天井に衝突するしな」

「あー……。はいはい、分かりましたっば……。あ痛っ！」

面倒くさげに言いながら、ガッツに続いて立ち上がったアルフは、ガッツが注意した通り、鴨居にしたたかに頭をぶつけて悲鳴をあげた。

リヴァイヴァは二人の会話など聞かぬ気に、フライパンの中の野菜炒めの残りを別の皿に盛り付けている。今日もまた、彼らにとつてはありふれた一日が始まりそうだった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4854e/>

暇な奴らの日常生活

2009年5月29日01時03分発行